
鬼軍曹と海賊分隊

スケルトン大佐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼軍曹と海賊分隊

【Nコード】

N9587W

【作者名】

スケルトン大佐

【あらすじ】

南方行きの貨物船のはずが戦闘の最中知らない場所に出てしまう。また日本の土を踏むため選んだのは海賊家業だった。

再び南方へ

夕方からは看護婦さん達の手も借りて見張りを続ける。船長の赤木少尉の話では（先行している連中が襲われてないから大丈夫。）らしいが安心出来ない。何もしてないがクタクタになった。無線封鎖の為海軍からの情報を聞いているしかなかった。

寝不足で迎えた4日目の夕方、航海長の寺田少尉がやって来た。「先に行った連中が喰われたらしい。損害は軍機に触れるんで言わないがどうも壊滅らしい。」聞いているとどうも不正確だが、仕方が浮き輪でも用意しといてくれ。」秋谷に水筒と乾パンなんかを準備させ各自携帯する。「大砲の訓練とかしなくて宜しいですか？」心配そうな顔をした田口が聞いてきた。「無駄な事はせん。どうせ撃たれたら終わる」熊さんが酒をカバンに詰め込んでいる。「そうそう、アホみたいにしがみついて死んでもつまん。先の一手考えんと。」ご飯を交代で食べ、見張りが疎かにならないようにしていた。

闇夜の船出

灯火管制が敷かれた港は、鼻を摘ままれても分から無いほど暗かった。最後の点検の為、赤いセロハンをはめたランタンを持った船員や港湾作業員が忙しく動く。明るい内に大砲の整備と装填を済ませたので我が分隊は暇だった。「こう暗いと照準大変だな。」最大射程6千程届くが、観測分隊がいる時と、天気がいい時だけだ。「クレーンの上でも上がりますか？」熊さんが真面目な顔で聞いて来た。「止めとけ。見えても有線電話が無いんじや着弾修正も出来ない。潜水艦相手じゃ手も足も出ない。浮上してくれば相手してやるよ。粗方作業員が下船し船に落ち着きが戻って来た頃、賄いのおにぎりが届いた。薄暗い船室でよく見ると白いおにぎりだった。

「海軍さんいい物食べてるな。メザシまで付いてる。」田口と秋谷はペロツと食べまだ足りないような顔をしている。「芋とか大根が入ってるご飯ばかりで、白いご飯見るのは久しぶりであります。」

まだ16や17じゃ食い盛りだろう。我が分隊を載せた吉川丸は

ダグボートに引かれ港を後にした。

低出力の焼き玉機

関が単調な音を起てる、まだ瀬戸内なので波は穏やかだ。「外洋に出た途端船酔い始まるさ。今はよく休んでくれ。瀬戸内じゃ潜水艦の心配も無いしな。」瀬戸内を抜けるのに3日かった。たにせ速度が高速貨物船の半分以下自転車並みだった。拳げ句太平洋に出たとたん後から来た船団にアツサリ抜かれた。「腹痛船団は速度がなくて回避運動も出来ない」航海長は苦笑いした。

外洋は波高し

夕方からは看護婦さん達の手も借りて見張りを続ける。船長の赤木少尉の話では（先行している連中が襲われてないから大丈夫。）らしいが安心出来ない。何もしてないがクタクタになった。無線封鎖の為海軍からの情報を聞いているしかなかった。

寝不足で迎えた4日目の夕方、航海長の寺田少尉がやって来た。「先に行った連中が喰われたらしい。損害は軍機に触れるんで言わないがどうも壊滅らしい。」聞いているとどうも不正確だが、仕方が浮き輪でも用意しといてくれ。」秋谷に水筒と乾パンなんかを準備させ各自携帯する。「大砲の訓練とかしなくて宜しいですか？」心配そうな顔をした田口が聞いてきた。「無駄な事はせん。どうせ撃たれたら終わる」熊さんが酒をカバンに詰め込んでいる。「そうそう、アホみたいにしがみついて死んでもつまらん。先の一手考えんと。」ご飯を交代で食べ、見張りが疎かにならないようにしていた。

敵潜水艦近し

夕方からは看護婦さん達の手も借りて見張りを続ける。船長の赤木少尉の話では（先行している連中が襲われてないから大丈夫。）らしいが安心出来ない。何もしてないがクタクタになった。無線封鎖の為海軍からの情報を聞いているしかなかった。

寝不足で迎えた4日目の夕方、航海長の寺田少尉がやって来た。「先に行った連中が喰われたらしい。損害は軍機に触れるんで言わないがどうも壊滅らしい。」聞いているとどうも不正確だが、仕方が浮き輪でも用意しといてくれ。」秋谷に水筒と乾パンなんかを準備させ各自携帯する。「大砲の訓練とかしなくて宜しいですか？」心配そうな顔をした田口が聞いてきた。「無駄な事はせん。どうせ撃たれたら終わる」熊さんが酒をカバンに詰め込んでいる。「そうそう、アホみたいにしがみついて死んでもつまらん。先の一手考えんと。」ご飯を交代で食べ、見張りが疎かにならないようにしていた。

敵潜水艦近し2

ノロノロ前進する我が船団は、次の日の夕方大量の浮遊物を発見した。重油やゴミに死体が浮いている。一隻のタンカーが炎を吹き上げながら、かるうじて浮いていた。「とどめを刺さなかったな。船団の生き残りを追いかけたか、助けに来た船を狙っているか。どちらにしても助けている暇がないがな。」航海士が厳しい顔で眺める。「奴らこの船の事、知っているのですか？」田口がキョロキョロ辺りを見ている。「知っていると。水の中ではかなり遠い音を拾える。俺の予想だと今夜遅く来るよ」船内の空気が重くなった。無理もない沈み行く船を目の前にしたのだ。潜水艦の影に怯え、交代の時間がきても、双眼鏡を目から離せなかった。

真夜中の敵

何事も無く夜明けを迎えた。明け方は攻撃が少ないと教えられたせいか、朝日を見るとホツとする。朝飯の乾パンと味噌汁が運ばれてきた。食欲もないまま、無言で流しこんだ。「どうやら、俺達は追われているらしい。」タハコを吸い上がった柿沼機関長が「ぼやいている。」「なぜ判るんです？まだ潜水艦のせのじも見えへんのに。」「双眼鏡のレンズを拭きながら聞いてみた。」「そやね、英語の電文増えてらしいわ。すに考えて誰か見付かった思うやろ。この近所おるん、うちらだけやで。よう見張つてや。底で働いてるものの為にも。」柿沼機関長はタハコを海に捨てると機関室にもどった。

真夜中の敵 2

明るい海面を船は走った。快調なエンジン音と引き換え、乗組員の心はかなり重かった。前方には、黒い雲が見えるが波はそれほど高くなかった。「秋谷しつかりせんか、眠いなら代わるから。」緊張の連続で疲労がピークになったんだろう。「軍曹さん、食事ですよ」看護婦さんが食事を運んできた。皆、無言で口に運ぶが味はしなかった。「ご飯の後飲んでください。」皆の酷い顔を見た看護婦がビタミン剤をおいていった。口数が少ないまま時間が流れていった。ここまで大丈夫だったらもしまあ助かるかも思ってしまう。夕方、空に厚い雲がでて波がたち始めた。このまま悪天候になれば発見される確率も下がるなど考えていた矢先、左手を見張っていた看護婦たちから声が上がった。「魚雷や！熊さん大砲左手や。」俺は軽機関銃を魚雷に向けて発砲した。魚雷を潰す訳でない。味方に魚雷の位置を知らせるためだった。吉川丸は舵を切りなんとか回避したが隣の船は船体後方に命中した。ものすごい水柱が立ち衝撃波がきた。水柱が消え隣の船も消えゴミや油が浮いていた。「秋谷、弾や。熊さん照準2000に合わせとけ。魚雷来た方にばらまけ。」熊さんがハンドルを回し角度を調節している。「よっしゃ！適当にばらまくぞ。ジャンジャン装填せいや。」魚雷が来た方向にドンドン発砲はしめた。吉川丸は天気が悪い方向に回避、視界の悪さを味方に逃げるらしかった。「魚雷来ます！」秋谷の絶叫に近い声。船体に向かって白い線が伸びる。（ここまでか）俺は秋谷を押し倒し手近の手すりにしがみついていた。熊さんも田口の鉄兜を甲板に押さえつけた。もう少しで命中か？と思われたが、爆発音も水飛沫も来なかった。なんと魚雷が船底をくぐり抜け反対側へ抜けて行った。「助かった。潜水艦はどこだ？」皆キョロキョロ見ている時、遠い海面を黒い潜水艦が浮上してきた。どうやらあれが最後の魚雷らしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9587w/>

鬼軍曹と海賊分隊

2011年10月4日03時38分発行